

令和3年度 学校経営計画書

石川県立金沢泉丘高等学校（全日制課程）

学校長 中村 義治

1 教育目標

心身一如の発達につとめて

真理を求め、勉学を第一義とすること

情操を豊かにし、自らの品位を高め、他者の人格を重んずること

正義を愛し、誠実にして、社会から信頼されること

2 中・長期的目標

(1) 学校の現状

- ① 本校は、創設以来「心身一如」を校是とし、調和のとれた人材育成に取り組んでいる。「確かな学力」を身につけさせるとともに、次世代を担う心身共に健全で品位と良識あふれるリーダーの育成をめざし、保護者や県民から信頼される学校づくりを進めている。
- ② 大学進学に関して、県内有数の進学校としての実績を収めている。世界を視野に高い志を掲げて学習させるとともに、第一志望を実現させることをめざしている。
- ③ 平成15年度からSSH研究開発1期目の指定を受け昨年度4期18年が終了した。次期申請に向け、国際的に活躍できる科学技術系人材の育成プログラムの完成を目指している。
- ④ 平成27年度からの5年間のSGHの指定が終了し、グローバルな社会課題に関し、多面的に考え、多角的に行動する力を備えた、国際舞台で活躍する人材の育成のための本校独自の探究活動プログラムが形になり、本校普通コースにもその指導のノウハウは波及している。そして新しい金沢泉丘SGHプログラムの開発に取り組んでいる。
- ⑤ 平成24年度に「いしかわニュースーパーハイスクール」の指定を受け、人文科学、自然科学の両分野における幅広い教養を身につけ総合力を備えた、国際性に優れた次世代を担うリーダーの育成をめざしている。本県ニュースーパーハイスクールの牽引役の使命を担っている。

(2) 生徒に関する中・長期的目標

- ① 「確かな学力」の育成
進学実績の向上をめざし、確かな知識に基づいた深い学びにつながる質の高い教科指導を、GIGAスクール構想を踏まえつつ、主体的・協働的な学習方法を取り入れるなどして、組織的に展開する。
- ② 豊かな心の育成
「心身一如」の具現化に向け、部活動・学校行事・社会奉仕活動等の教育環境・設備を整え、次世代を担うリーダーに必要な人格の陶冶をめざす。

(3) 教職員・学校組織等の望ましい在り方

- ① 指導力の向上と組織の活性化
県民目線で教育公務員としての規範意識をしっかりともち、法令を遵守する。効果的な教育活動を展開するために、研究授業や職員研修会を通して教職員の指導力を高める。また、組織運営の合理化・効率化を推し進めることにより、教職員がワーク・ライフ・バランスを維持し、活力と創造力を十分に発揮することのできる職場環境を形成する。
- ② 開かれた学校づくり
本校の方針や特色ある取り組みを、積極的に県民に伝え、広く協力・支援が得られる学校とする。また、PTAや地域社会とも連携することによって、本校の教育活動が有機的に展開することをめざす。

3 今年度の重点目標

創立128年目を迎える歴史と伝統を踏まえ、建学精神に基づいた教育活動の実践に努める。

- (1) 「勉学を第一義とする」を踏まえ、質の高い学力を育成する。
・ 知的好奇心旺盛な生徒に質の高い授業を提供する。生徒の質問力を高める、本質に触れるなど指導法の研究・改善に努める。新しい大学入試で求められる力及び大学卒業後もイメージし、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。
- (2) 探究活動プログラムの進化・発展に努める。
・ これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させるとともに、その指導法を本県高等学校に波及させる。また、SSH次期申請に向けSSH・SGHプログラムを融合させるなど新しい探究活動を研究する。
- (3) 「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。
・ 挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。
- (4) 「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。
・ 授業公開など学校公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。
- (5) 組織運営・教職員の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。
・ 効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。

令和3年度 学校経営計画に対する最終評価報告

石川県立金沢泉丘高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)および次年度の扱い(改善策)
<p>1 「勉学を第一義とする」を踏まえ、質の高い学力を育成する。</p> <p>知的好奇心旺盛な生徒に質の高い授業を提供する。生徒の質問力を高める、本質に触れるなど指導法の研究・改善に努める。新しい大学入試で求められる力及び大学卒業後もイメージし、過年度生も含めた生徒の高い進路志望の実現を図る。</p>	<p>① 授業を通して「生徒の質問力の向上」「本質に触れる指導」を目指す。そのため、「生徒の質問力」「本質に触れる指導」をテーマとした研究授業を、各教科や少人数のグループで行い、授業改善に取り組む。</p>	<p>「授業が充実しているか」の質問に対して、以下の①から④と答えた生徒の割合を算出し、順に4、3、2、1を乗じて、加えた値 α を算出する。</p> <p>①「よくあてはまる」 ②「ややあてはまる」 ③「あまりあてはまらない」 ④「全くあてはまらない」</p> <p>α の値が A 3.60以上 B 3.55以上 C 3.50以上 D 3.50未満</p>	<p>[判定] A 3.64</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・12月に実施した授業評価で、「授業が充実しているか」の質問に対する全体の平均が3.64であった。昨年同時期3.62、一昨年同時期3.63と比べて上昇している。また7月実施の授業評価に対しては各教科とも高い結果であった。 ・授業で扱う教材の教員間での共有化が進んだことや、「質問力向上」と「本質に触れる授業」をテーマにした研究授業を行うなど等、これまで以上に授業改善がなされ、生徒が主体的・能動的に参加する授業になっているからだと思われる。 ・昨年度は休校期間が続いたため、生徒はより授業の大切さを感じたようだったが、休校がほぼなかった今年度はさらに増して授業の大切さを感じていると思われる。 ・来年度は、今まで以上に研究授業も含め授業改善につなげていきたい。
	<p>② 模試や大学入試の分析結果を提供し、大学・学部研究を深め、難関大学を志望する生徒の意欲を高める。特に、3年生には、東大・京大・医学部説明会や補習など、第1志望を貫く集団づくりを進める。また、習熟度別授業や校内模試問題の研究により、深い思考力と質問力の育成を進める。</p>	<p>東京大学・京都大学および国公立大学医学部合格者の合計人数(重複可)が、 A 40人以上 B 30人以上 C 20人以上 D 20人未満</p>	<p>[判定] B 東京大学9人 京都大学14人 国公立大学医学部11人 合計34人</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・東大・京大・医学部説明会を6月、10月に行い、さらに難関大別模試(実戦、オープン模試等)を夏と秋に受験させることにより、難関大学志望者の意識付けを行い、意欲を高めることができた。 ・1月末から2月初めに東大・京大出願者に対して本番実戦テストを受験させ、学力向上を図った。 ・東大・京大・国公立大医学部を含め、難関大学合格者数増加を目標に、オールマイティーな学力の生徒を育てる指導を続けたい。
	<p>③ 1年ホーム担任は担当生徒に対し、年間6回以上の個別面接指導を実施する。また、学習時間調査の結果も踏まえ、家庭学習の定着を図る。</p>	<p>一年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>[判定] B 92.9%</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ホーム担任は、年間4回～5回の面談を行った。学年会で生徒からの質問事項などを確認し、時期に応じた生活や学習に関するアドバイスを心がけるとともに、悩み事などにも耳を傾け、場合によっては学年団として共有した。担任毎の指導の不一致などが起こらないよう週に1回の学年会で常に意見交換した。 ・生徒に、進路について具体的に考えさせ、より高い志望校を設定させることにより、自発的かつ意欲的な学習を促していきたい。
	<p>④ 2年ホーム担任は、年間5回以上の個別面接指導を通して、高い進路志望の確立を図る。また、学習時間調査の結果も踏まえ家庭学習の定着を図る。</p>	<p>一年間の学年団の指導が、自分の学力や学習姿勢の向上に役立ったと考える生徒の割合が、 A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>[判定] A 97.1%</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・対面による面談回数は5回から6回であり、生徒一人一人のメンタル面のケアや進路指導を行ってきた。延期された修学旅行を12月に実施し、生徒に、1月からは最終学年へ気持ちを切り替えるよう指導している。 ・高い志望を設定する生徒が多い中、授業内容の高度化と周囲の意識の変化についていけず、戸惑う生徒も見られる。教科担当やホーム担任が、学年全体が能動的に受験勉強をスタートさせるように、丁寧な意識づけを行っていく。
	<p>⑤ 授業内容をより充実させるとともに、放課後補習および個人添削等を通して、生徒一人一人の志望や学力にあわせた指導を展開していく。</p>	<p>難関10大学及び国公立大学医学部医学部の合格者数が、 A 100名以上 B 90名以上 C 80名以上 D 80名未満</p>	<p>[判定] A 難関10大学96人、国公立大学医学部医学部11人、合計107人</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・1、2年次までの、学年全体で生徒の志望を共有し、安易に志望を下げさせない指導を継続した。特に東大、京大志望者には、早期にクラスを横断して補習添削指導を行った。担任の指導により、多くの生徒は第1志望を貫いた。東大への出願が過去最高となったことも、学年の指導が結果した結果であると考えている。次年度以降にも期待したい。
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>	<p>・海外の大学への直接の進学状況は。希望する生徒がいる場合の進学指導体制はあるのか。</p>			
<p>学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策</p>	<p>・昨年度、海外の大学への進学は3名。これまで1、2名だったので多いという印象。海外の大学への進学指導は、英語などの先生の知識や経験のみで、組織的な対応が必要となっている。</p>			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)および次年度の扱い(改善策)
2 探究活動の進化・発展に努める。 これまで積み上げてきたSSH・SGHプログラムを進化・発展させるとともに、その指導法を本県高等学校に波及させる。 また、SSH次期申請に向けSSH・SGHプログラムを融合させるなど新しい探究活動プログラムを研究する。	① カリキュラムの中の科学的な課題研究活動を充実させることで、生徒の探究力・思考力・行動力の向上を図る。また、それぞれの探究活動において生徒が自らの変容を確認できるファイルの作成に取り組む。さらに文理融合の課題研究への取組も実践する。	『AI 課題研究Ⅰ』(1年)『AI 課題研究Ⅱ』『SS 課題研究Ⅰ』(2年)『AI 課題研究Ⅲ』『SS 課題研究Ⅱ』(3年)は、「探究力、思考力、行動力を高める機会になっている」の項目で、「よくあてはまる」「あてはまる」と回答するSSH主対象生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] B 1年 93.3% 2年普 58.2% 理 100% Av. 79.1% 3年普 63.2% 理 94.7% Av. 79.0%	・今年度もコロナ禍の影響で様々なSSH行事の変更を余儀なくされた。課題研究の発表会もオンラインによる交流が主となり、直接見る、聞くという体験から得られる気づきや学びの深まりが失われた。ZoomやYouTube Live等のオンラインツールの効果も生かしつつ、Authentic(本物)に触れることの大切さも重視し、SSH事業の取組を進めていきたい。 ・理数科課題研究は、SSH19年の指定期間を通じて、指導体制や3年間を通したプログラムが確立している。一方、普通科普通コース理型の課題研究は、昨年度からプロジェクト型課題研究を取り入れており、プログラム設計がまだまだ不十分である。次年度以降3年間を通したプログラムを確立していく必要がある。 ・SGコースとの協働をさらに進め、「文理融合」の実現に向け、カリキュラム開発をしていくことが課題である。 (数値は、理数科、普通科別々に集計し単純平均で算出)
	② 課題研究を中心とした探究型学習のプログラムの改善を図り、より「文理融合」を強化したカリキュラム開発を行う。また、問いを立てる力の育成など他にも新たな目標を設定して、その達成のために事業を展開する。	『SG 探究基礎』(1年)、『SG 探究』『NS 探究α』(2年)、『SG 探究活用』『NS 探究β』(3年)に関して、「相手を意識し、かつ客観的な根拠に基づき、自らの考えを論理的に表現する能力を高める機会となっている」という項目で、「よくあてはまる」「おおむねあてはまる」とする生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] B 1年 82.5% 2年 85.2% 3年 84.9%	・今年度もコロナ禍の制約が続いたため、昨年度同様、これまで構築してきた実証的な探究学習をさらに発展させる計画は、大幅に修正した。一方で、オンラインとオフラインのハイブリッド形式のノウハウを活用した各種発表会の実施や、指導助言の機会の創出など新しいプログラムの可能性を模索することはできた。次年度は、教職員が生徒にとっての学びを止めないための工夫を継続し、より“実践”を意識した探究のあり方を追究することで「社会に開かれた教育課程」の実現を目指していきたい。 ・SSH推進室との協働をさらに進め、「文理融合」の実現に向けて、カリキュラム開発をしていくことが課題である。
学校関係者評価委員会の評価	・SSHの取組や、課題探究型プロジェクトの実践をしっかりとやっていることが確認できた。 ・現状分析から得られる課題の認識と克服のための計画も適切と思う。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・教育課程の特色を活かし探究活動をさらに進めていく。 ・コロナの影響で様々なことに取り組んだ。オンラインによる発表形式は限界も感じた。今後どのような形がよいか検討していく。			
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。 挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。	① 各種の講演会を生徒の発達段階に応じて適正に開催し、品位を高め心豊かで、グローバル人材となる資質を育成する。	「講演会が知識や経験を学び、生き方を考える良い機会となっている」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] B 87.0%	・今年度、2年ぶりに開催することができた「生き方講演会」では、プロバスケットボールチーム代表取締役の方をお招きした。日頃接することが少ないスポーツ経営の側面からの講演は、シンプルではあったが生徒には伝わりやすい内容で、感化された生徒が多くいた。 ・一昨年度の評価(A 91.2%)を下回ったが、過去の「生き方講演会」開催年度と同程度の評価であった。 ・今後も生徒の満足度の高い講演会を企画、実施したい。
	② 基本的生活習慣の確立を図ることを目的に、挨拶の指導を徹底する。 ・場面に応じた、元気で明るくさわやかな挨拶 ・授業の開始、終了の挨拶 ・職員室等の入室マナー	「場面に応じた元気で明るくさわやかな挨拶ができています」と答えた生徒が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満	[判定] C 82.6%	・外部からの来校者に対してしっかりと挨拶をしている生徒がまだ少ない。 ・挨拶は、人と人をつなぐ大切な行動であること、他者を尊重し、良好なコミュニケーションを図るために必要な行動であることをHRや学年集会等を通して、繰り返し指導していく。
	③ 「いじめを絶対に許さない」学校づくりを推進するために未然防止の取り組みを行う。	「他人の人格を重んじ、尊重する態度で接するとともに助け合う仲間づくりができる」と答えた生徒が、 A 98%以上 B 95%以上 C 90%以上 D 90%未満	[判定] B 95.0%	・昨年比0.1ポイント減であった。今年度も挨拶指導や新型コロナウイルス感染者に対する差別防止の啓発等を通して、他者を尊重し、良好なコミュニケーションを図ることの重要性を啓発してきた。 ・他者の言動を尊重し、承認する態度を育む指導を継続していきたい。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析(成果と課題)および次年度の扱い(改善策)
3 「品位を高め、他者の人格を重んずること」を踏まえ、よりよき集団づくりをめざし、 絶えず自己研鑽に努める生徒を育てる。 挨拶の励行、体力の向上、環境美化、部活動・生徒会活動の活性化に努める。	④ 部活動等の活性化及び競技力の向上を図るとともに部活動と勉学の両立(文武両道・文武不岐)をめざす。	県予選を突破しブロック大会以上の大会・行事等に出場した部活動が、 A 21以上 B 17以上 C 13以上 D 13未満	[判定] C 16の部活動が出場した	・昨年度、ブロック大会以上の大会に出場した部活動は13であったので、今年度は数が増えている。 ・部活動と勉学の両立を図り、短時間でも集中した活動になるように工夫する。また、生徒がより主体的に活動する取り組みを推進していきたい。
	⑤ 環境ISO活動を意識して、環境保全に配慮した生活となるようにする。 ・ゴミの分別・節水・節電 ・学校周辺のゴミ拾い	校内の環境保全活動に努めていると答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] B 88.9%	・昨年比2.3ポイント向上した。探究活動を取り入れた授業では、本校のゴミ問題等の環境保全に関する研究テーマも見られた。発表会等による他の生徒への啓発が期待できる。 ・誰もいない自習室の照明が点灯したまま、開けた窓を閉めないなどの事例が散見されるので、生徒の環境保全意識を高めることが課題である。
	⑥ 読書と学習環境の整備に努め、学校図書館としての機能と魅力を高める。 委員会活動、購入図書の精選、広報活動、教科や調べ学習の場の提供などに努め、貸し出し冊数や入館者数の増加を図る。	1年間の図書の貸し出し冊数が、 A 4,500冊以上 B 4,000冊以上 C 3,500冊以上 D 3,500冊未満	[判定] A 4,865冊の図書貸し出しがあった。昨年に比べて18%増加した。(3月末まで)	・3月末までの図書貸出冊数は昨年度比18%増、図書館入館者数は12,254人で、昨年度比4%増であった。今年度も昨年に引き続き新型コロナウイルス感染予防のため、図書閲覧室の座席を半分に間引いたが、授業や調べ学習での貸し出し、また読書感想文課題での貸し出し、加えて読書感想画などの課外授業での貸し出しもあり、1、2、3学年ともに個人の貸し出しが増加した。図書館の利用状況はたいへん好調であった。 ・次年度もコロナ感染予防対策を講じながら魅力ある図書館づくりに取り組んでいきたい。
	⑦ 悩みや問題を抱える生徒の早期発見に努め、教職員間の連携を密にしながら、生徒一人一人が希望を持って学校生活を送ることができるように支援する。	相談室を利用した生徒による学校評価アンケートの「気軽に相談でき利用しやすい」の項目で、「よくあてはまる」+「ややあてはまる」の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] D 68.0%	・教育相談のために相談室を利用した生徒は3月末現在で延べ80名、実人数40名であった。 ・担任や学年主任を通して、悩みを抱えた生徒やその保護者に積極的に相談室を紹介し、気軽に相談室を利用できる環境づくりに取り組んでいく。 ・担任を含めた教職員、保護者、スクールカウンセラーなどと連携を図り、生徒一人一人が希望を持って学校生活を送ることができるよう支援していく。
学校関係者評価委員会の評価	・挨拶に関してはマスク着用の中、相手の表情も読みにくく、どうしても挨拶しにくい状況であり、この評価はある程度は理解できる。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・挨拶等については、決して軽視しているということではなく、丁寧に指導を続けていきたい。 ・部活動や学校行事は、生徒が成長するには必要なものであることから今後も積極的に実施に向け検討していく。			
4 「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。 保護者懇談会、授業公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。	① 保護者懇談会、PTA活動、いしかわ教育ウィークなどを通して積極的に学校を公開し、保護者や地域住民との連携を強くし、開かれた学校づくりをめざす。	今年度の「PTA総会」、「いしかわ教育ウィーク」・「生き方講演会」の保護者・地域住民の来校数が合わせて、 A 1200人以上 B 1000人以上 C 800人以上 D 800人未満	[判定] D	・今年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、5月「PTA総会」は中止とし、11月の「いしかわ教育ウィーク」は保護者のみの参加とした。また、8月下旬の文化祭も在校生のみで実施したが、野外劇は、3年保護者の来校を許可した。 ・10月の「生き方講演会」は生徒のみの参加とし、保護者の方へはライブ配信を実施した。 ・1・2学期の保護者懇談はコロナ対応の中実施した。 ・「いしかわ教育ウィーク」には過去2番目の308名の保護者が来校した。 ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、学校行事への保護者・地域住民の来校が難しい状況が続くが、来年度も学校公開実現に向けて前向きに取り組む。
	② 理科教1、2年生、SSH委員、SS部及び科学系の部所属の生徒が「金沢泉丘サイエンスグランプリ」、「創立記念祭における理科教室」等、自ら企画・運営・参加する機会を増やし、内容を充実したものとすることで、科学教育の面から地域に貢献する。	「理科教室や金沢泉丘サイエンスグランプリおよび金沢子ども科学財団との連携プログラムに参加して、どう思いますか」という質問に対して「大変良かった」と回答するプログラムの参加者の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] C 77.0% (3回の平均)	・今年度の創立記念祭も昨年度に続き、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、在校生のみの参加となった。地域の科学教育への貢献という点での来場者に対するアンケート調査は実施できなかった。企画・準備・運営については、例年通り全て生徒が行った。 ・金沢泉丘サイエンスグランプリについては、4/24(土)第1回(参加者168名)、9/11(土)第2回(参加者29名)、2/11(金・祝)第3回(参加者本校生41名、中学生15名)の計3回実施した。いずれも物理部の生徒やSSHプロジェクト系の生徒が中心となって企画・運営を行った。それぞれの実施後のアンケート調査において「参加して、どう思ったか」という質問項目で「大変良かった」と回答した生徒の割合は、第1回81.9%、第2回79.3%、第3回69.7%であった。第3回は初めてオンライン開催とし、高校生と中学生がZoomで「一刀切り」の競技で交流した。小中学生との新しい連携の可能性を感じることができた。ただ、オンライン開催は初めてだったので、準備不足な面があった。次年度は、オンラインであってもスムーズで充実した内容になるように、しっかりと準備して実施したい。

		具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）および次年度の扱い（改善策）
4	「正義を愛し、社会から信頼されること」を踏まえ、生徒とともに開かれた学校づくりに努める。 保護者懇談会、授業公開の機会の拡大を図る。地域社会と連携したボランティア活動を推進する。	③ 「学年だより」、「進路だより」等を通じて、保護者に学校の様子を理解していただく機会を増やし、保護者の学校行事への参加拡大につなげていく。	「学校からのたよりによって、学校の様子がわかる」と回答した保護者が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	[判定] 1年 B 81.8% 2年 C 76.6% 3年 C 76.5%	[1年] 学期ごとに行事予定表を保護者の方に配付し、学校行事等を確認いただいた。学習については進路だよりを発行した。（11回）。学校行事等を、こまめにホームページにアップすることが今後の課題である。 [2年] 「学年だより」を3回、「進路だより」8回を発行した。行事、生徒の様子、模試の結果などを提供した。次年度は行事以外でも様子をお知らせしたい。 [3年] 「学年だより」を3回、「進路だより」9回を発行した。行事、生徒の様子、受験情報などを提供した。次年度は、より充実した内容のたよりを提供したい。
5	組織運営・教職員 の働き方の改善により、教育活動の効果を一層高める。 ・効率的で密度の濃い学習活動、部活動・生徒会活動の推進に努める。	① 業務の見直し、密度の濃い会議運営など組織運営の効率化、職場環境の改善、教職員の意識改革、時間管理の工夫等を進めることにより、教職員のワーク・ライフ・バランスをとり、教育活動の質の向上を図る。	ワーク・ライフ・バランスをとることにより、気力、知力、体力が充実し、一層効果的な教育活動を展開できていると回答する教員の割合が、 A 80%以上 B 60%以上 C 40%以上 D 40%未満	[判定] A 97.3%	・月に2度の定時退校日、部活動休養日の設定や、夏季休業中の学校閉庁日の設定、年休の積極的な取得などを通して、効率的な業務への取り組みやワーク・ライフ・バランスをとることへの意識がさらに高まった。 ・Google Formを活用したアンケート集計や小テストの実施、自動採点ソフトの導入、職員会議のペーパーレス化をすすめた。さらにICTによる教材開発や教材共有などを教育活動の質の向上につなげていきたい。
学校関係者評価委員会の評価		<ul style="list-style-type: none"> ・準備がさらに面倒になることは理解できるが、学校行事はリモート配信や録画配信をより活用してはどうか。 ・先生方の多忙化が叫ばれる中で、様々な工夫によりワークライフバランスが取れているとの評価が高いことはとても良いことと思います。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策		<ul style="list-style-type: none"> ・今年度、2、3年の保護者会は中止となり、進路課の進路講話のみ、録画配信を行った。評議員会等についても、ZOOMの使用を検討していきたい。 ・教員の働き方改革は、定時退庁日の実施や管理職からの積極的な働きかけにより少しずつ進んでいる。さらに推し進めたい。 			